

第9章

広田の歴史と文化財



ひろたの位置

この地域の小中学校

小学校：広田小学校

中学校：広田中学校

ひろた れきし ぶんかざい
第9章 広田の歴史と文化財

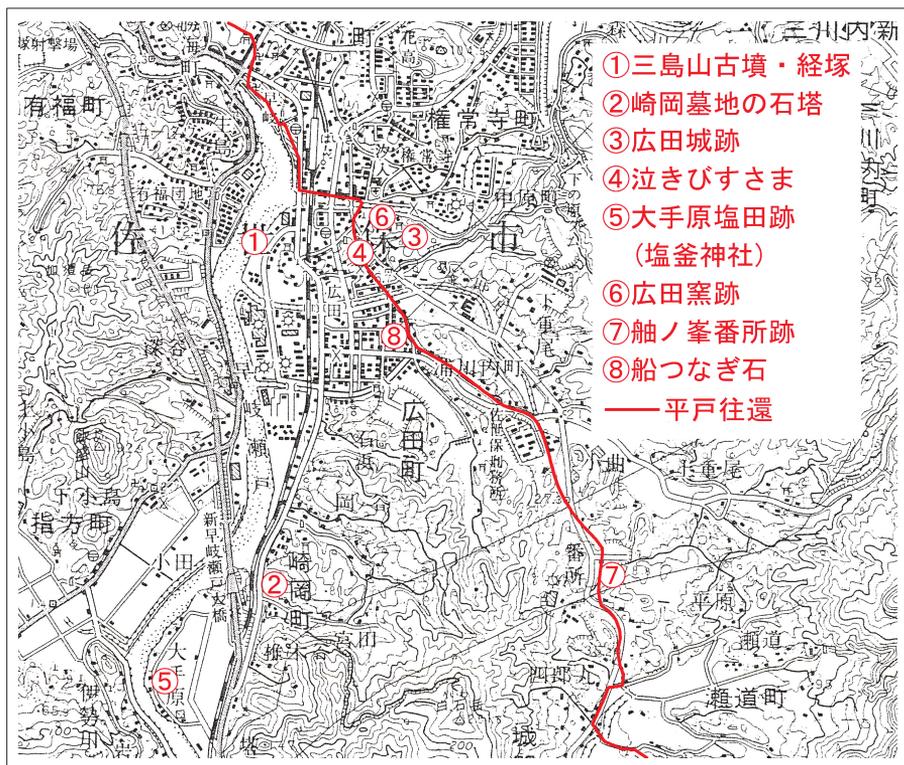
かつての藩境

広田地区は、広田町や崎岡町、浦川内町、重尾町の範囲です。西は早岐瀬戸、北は小森川、南は舢ノ峯から白石岳（標高261メートル）、東は波佐見町に接する地域となります。江戸時代は平戸藩の最も南にある村で、大村藩との境には舢ノ峯番所が置かれていました。



ひろた地区遠望

地区の中央部に金田川が流れています。河口付近では江戸時代に干拓が盛んで、その名の通り、広い水田でした。しかし、最近ではその水田が住宅地に変わりつつあります。



ひろたの地図

れいじょう みしま
霊場「三島」

早岐瀬戸に面して三島という小高い丘があります。ここは、江戸時代の始め頃は小さな島でした。この島は、古くから神社が祀られるなど、信仰の対象となっていました。そのため「御島」と崇められ、それがいつしか「三島」となったといわれています。

その三島には、今から約1,500年前の古墳があります。直径約6メートルの盛土をもった古墳と、それに従うような箱式石棺群からなっています。



三島山古墳の須恵器

佐世保市博物館島瀬美術センター所蔵

古墳にどのような人が葬られたのかは、発掘されていないのでよく分かりませんが、恐らく、早岐や広田に住んでいた豪族とその一族の墓と考えられます。もしかしたら、奈良時代に早岐にいた「土蜘蛛」(第8章早岐参照)と呼ばれた人たちの先祖かもしれません。

- 1 住吉神社の丘と並んで瀬戸に浮かぶ三つの小島に見えたことから、「三島」となったとする説もある。
- 2 板状の石を箱型に組み合わせさせた墓。弥生時代から古墳時代にかけて造られた。



三島山経塚出土品

佐世保市博物館島瀬美術センター所蔵

三島には、古墳だけではなく、今から約900年前の平安時代の遺跡もあります。

丘の頂上に穴を掘り、経文と銅鏡を入れた滑石製の経筒と焼き物を納めたもので、「三島山経塚」と呼ばれています。経塚に納められていた銅鏡や焼き物は中国からの輸入品で、当時としては大変貴重なものでした。

三島山経塚から出土した経筒や鏡、焼き物は佐世保市の文化財に指定されています。

平安時代の終わり頃になると、全国各地で戦争や飢饉が相次いで起こりました。この様子を見た都の貴族や僧侶たちは、「世も末」つまり仏教が滅びる「末法」の時期の始まりと考えたのです。そして、将来仏教が復活するにはお経がなくてはならないと考え、お経を地下に保存しようとしたのです。

都から遠い西の端までその信仰は伝わり、早岐か広田にいた有力者が経塚を造ったのです。中国から輸入された焼き物や鏡など、大変貴重な品物が納められていることから、相当な財力を持った人が造ったと考えられます。

経塚は、古代の品物や、文化を現代に伝えるタイムカプセルなのです。

- 3 主に西彼杆半島で取れる大変やわらかい石。保温性に優れ、古代から中世にかけて石鍋の材料になった。



みしまえんぼう
三島遠望

三島という小島は、お墓を造ったり、お経を埋めたりしていることから、当時の人々にとって特別な場所だったようです。今でも、眼鏡岩や福石観音(第1章佐世保市街地参照)のように、人々の信仰を集める場所は「霊場」と呼ばれていますが、三島も当時の「霊場」だったのでしょうか。

ひろたじょう たなか
広田城の戦い

三島山経塚以外に奈良、平安時代の遺跡は見つかっていませんが、崎岡町にある墓地には1350年頃の古い墓が残っています。これは、戦国時代に広田地方を領有していた武士の墓と考えられ、この地方が古くから開拓されていたことを物語っています。



さきおかぼら
崎岡墓地の石塔

また、この時代の墓としては九州でも最大級のもので、よほどの有力者でないと造ることはできなかったと考えられます。ひょっとすると、この墓の主は、三島山経塚を造った人の子孫かもしれません。

さらに時代が新しくなって、戦国時代の終わり頃になると広田城が築かれます。最初は平戸や田平の小さな領主だった平戸松浦氏は長い間に勢力を伸ばし、松浦鎮信(法印公)の代になると、北松浦半島を支配下におく戦国大名に成長していました。

松浦鎮信は最大に広がった領土のうち、最も南の守りとして広田城を築いたのです。その平戸松浦氏に対抗したのが大村氏です。大村氏の当主大村純忠は、大村から東彼杵郡と西彼杵半島などを支配する戦国大名で、日本で最初のキリシタン大名となったことで有名です。



ひろたじょうあたまんぼう
広田城跡遠望



ひろたじょうなわばりず
広田城縄張り図

広田城の戦いは1586年(天正14)に起こります。大村氏が、ももとは自分の領地だった早岐や三川内を取り戻そうとしたのです。大村方は、まず井手平城(第11章三川内参照)を攻め落とし、さらに広田城を包囲しました。真夜中に不意を突かれた井手平城は落城してしまいましたが、井手平城より大きく、守りの固かった広田城は持ちこたえ、平戸から駆けつけた援軍によって、大村方は追い返されてしまいました。



広田城の空堀

しやうわ ねんだいきつえい
昭和50年代撮影

昔ばなし～泣きびすさま～

小森橋を渡って重尾方面に少し行くと、道端に小さなお堂があり、2つの石が安置されています。地元の人たちはこの石を「泣きびすさま」、あるいは「子泣き地蔵」と呼んでいます。この石には次のような悲しい物語が秘められています。



広田の泣きびすさま

戦国時代、広田城が攻められたときのことです。

落城を覚悟した城兵の妻が、暗闇に紛れて城外に脱出しようとした。赤ん坊を抱いた妻女は、やっとの思いで金田川の近くまで逃げ延びたのですが、敵兵に見つかりそうになり、とっさにそばの竹やぶに身を潜めました。

そのとき、不運にも赤ん坊が泣き出したのです。妻女は必死になって泣き止ませようとしたのですが、赤ん坊はいっそう激しく泣き出しました。突然の泣き声に驚いた敵兵は、持っていた槍で竹やぶを突き刺したので、かわいそうに母子は突き殺されてしまいました。

戦いのあと、このことを知った村人たちは哀れに思い、墓を建てて母子の霊を弔ったそうです。

戦国時代、戦場となった場所には、このような悲しい昔ばなしが多く伝わっている。

落城した井手平城の近くにも「泣きびすさま」と呼ばれる大小の板碑が祀られている。こちらも親子の墓で、城兵の妻と子が、夫の帰りを待ちわびて死んでしまい、これを哀れに思った村人たちが供養のために建てたといわれている。(第11章三川内参照)

この二つの昔ばなしでは、いずれも幼い子供と、母親が犠牲になっているという共通点がある。いつの時代でも、戦争で最も被害を受けるのは子供や老人、女性といったいわゆる「弱者」なのだ。そのことを目の当たりにした人々は、「泣きびすさま」を祀ることにより、戦争の悲惨さ、愚かさや後世に伝えようとしたのかもしれない。

舢ノ峯番所できる

広田城の戦いが起こった1586年(天正14)は、豊臣秀吉が九州を平定する前の年で、戦国時代は終わりを迎えようとしていました。そのため、いつまでも戦いを続けることもできず、平戸方と大村方が領地の境を決める話し合いを同じく1586年に行っています。話し合いは重尾町と瀬道町との境にある舢ノ峯峠で行われましたが、なかなか結論が出ず、結局、今話し合っている舢ノ峯峠を境とすることに決まったと伝えられています。



番所の跡



藩境の石碑

この舢ノ峯峠はそのまま江戸時代の平戸藩と大村藩の境となり、平戸から長崎に向かう平戸往還(街道)の関所が設けられました。これが舢ノ峯番所です。明治維新を迎えるまで通行手形を見せなければ、通ることはできなかつたのです。1850年(嘉永3)にこの舢ノ峯番所を通った吉田松陰は、「藩境の石碑があり、鉄砲3丁と槍数本を備えていた」と記録しています。現在、番所の跡地は果樹園になってしまい、昔の面影はありませんが、吉田松陰の日記にも出てきた藩境の石碑は、近くの民家に保管されています。

平戸往還は、今の小森橋よりわずかに上流の橋を渡り、広田小学校の校門を通って浦川内から佐世保刑務所の中を通り、舢ノ峯番所に至ります。

盛んな新田開発と船つなぎ石

江戸時代に入ると、干潟を埋め立てた新田開発が盛んに行われるようになります。広田一帯の新田開発は1665年(寛文5)に完成したと伝えられています。この新田開発で、深い入り江だった浦川内も水田となりました。

新田ができるまでこの地が海だったことを示すものを広田公園で見ることができます。それは「船つなぎ石」と呼ばれる高さ1メートルほどの石柱です。この石は、2005年(平成17)に広田公園を造った時、浦川内に昔から伝わる由緒あるものとして、今の場所に置かれました。

名前の通り、「船つなぎ石」とは海のそばで船をつないでおくために使われたもので、かつてはこの石のすぐそばに海があったことを伝えているのです。



船つなぎ石

おおて ばるえんでん 大手原塩田

現在、長崎国際大学が建っている場所は、1791年(寛政3)に造られた平戸藩の製塩所、大手原塩田の一部です。塩田では「入浜式」と呼ばれる方法で塩が作られていました。

「入浜式」は砂浜に溝を掘って海水を引き入れ、「浜子」と呼ばれる人たちがビシャクで海水を砂浜に撒いていきます。砂が乾いてしまったら、また撒きます。これを繰り返すと砂に塩の結晶がついて白くなります。この砂を集めて水をかけると濃い塩水ができます。これを釜に入れて煮詰めると塩ができるのです。できた塩は俵につめて、船で早岐に運んで塩間屋に売っていました。



おおて ばるえんでんあと すいろう
大手原塩田跡の水路



しおがまじんじま
塩釜神社

明治維新で藩が無くなったあとも塩の生産は続けられていましたが、1905年(明治38)に塩の販売が政府の管理となったため、塩田は廃止されて畑に造りかえられました。今では、いくつか残る水路や塩釜神社にその跡をしのぶことができます。

のうみん 農民のくらし

江戸時代の広田は平戸藩の最も南にある農村でした。農民は厳しい農作業ばかりを行っていた訳ではありません。10日に1日くらい「村休み」という休みがあり、休養や娯楽を行う余裕もありました。

そういった農村には、様々な芸能が生まれました。浦川内浮立は、浦川内に伝わる農民の雨請い行事です。



うらがわちのうりやう
浦川内浮立

佐世保地方の浮立の中で、最も古いものは黒髪地区に伝わる木場浮立です(第2章日宇川流域参照)。これは1690年(元禄3)に西有田(現在の佐賀県西松浦郡有田町)の龍泉寺にあった浮立が伝わったものです。浦川内浮立も木場浮立と同じく、西有田の浮立を手本として始められたと考えられています。

浦川内浮立は第2次世界大戦中に行われなくなりましたが、その後復興しました。笛や太鼓、舞などを覚えていたお年寄りがいたから復興できたのです。毎年、9月1日の神社の夏祭りに、地区の大人や子どもが参加して上演されています。

地域の年表

時代	出来事
古墳時代	約1,500年前に三島に古墳が造られる。
平安時代	約1,000年前に三島に経塚が造られる。
室町時代	
1350年頃	崎岡に武士の墓ができる。
戦国時代	
1586年(天正14)	広田城の戦いが起きる。
江戸時代	
1651年(慶安4)	宮崎新田起工。
1653年(承応2)	宮崎新田完成。
1705年(宝永2)	大手原新田完成。
1757年(宝暦7)	大村領の百姓と土地争いが起こる。(大柳騒動)
1791年(寛政3)	大手原塩田完成。
近代	
1873年(明治6)	広田小学校が崎岡に創立される。
1889年(明治22)	崎岡、浦川内、重尾、宮崎免をもって広田村ができる。
1927年(昭和2)	早岐と合併して早岐村となる。
1942年(昭和17)	佐世保市に編入される。
現代	
1994年(平成6)	東部スポーツ広場完成。
2000年(平成12)	大手原塩田跡地に長崎国際大学開設。